様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０７６２３

研究課題名（和文）フラワーエコノミー論の構築とチューリップ球根産業の展開

研究課題名（英文）Flower economy theory and development of tulip bulb industry

研究代表者
宮部　和幸（MIYABE, Kazuyuki）

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：４０４０９０６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　フラワー・エコノミーを、育種・生産・卸売・小売・消費の中ですべての経済活動を構成するシステムとして定義した。それは公共および学術セクターを含む関連するフラワーのセクター間のすべての連携関係を示す。これまでの研究は生産者や産業の視点から行われていたため、消費者と生産者の視点を重視している。
　チューリップ球根産業は、最もグローバルゼーションが早くから進んでいる。1990年以来、経済状況とフラワーの取引が大きく変化している。このような経済状況は、花市場と国間の流通を変えた。フラワーエコノミーの概念を援用し、グローバリズムにいくつかの重要な事実と意味を見出した。

研究成果の概要（英文）：　We define flower economy as a system which composes of all economic activities in a stream of the breeding of flower, production, wholesale, retail and consumption. It compromises all relationships among plyers in the stream and the related sectors of flowers including public and academic sector. It emphasizes the view point of consumers as well as producers because the previous researches have sometimes been done from the view point of producers and industry.The tulip bulb industry has been globalized from the earliest. Since 1990 the economic situation and flower trade have greatly changed. These economic situations have also changed flower market and distribution among many countries. We apply the concept of flower economy for an analysis and find some important facts and implications in globalism.

研究分野：農業経済

キーワード：花き産業　チューリップ球根産業　グローバリズム　フラワー・エコノミー

１．研究開始当初の背景

世界のフラワー産業は、EU、アジア、アメリカの３つの生産・消費圏を形成し、なかでも日本は、アジアの中で極めて重要な拠点となっており、花きの生産・消費をめぐる情報が集積されている。それにもかかわらず、わが国の農業経済研究や農政のスポットライトは、常に米、野菜そして畜産を当て続け、フラワーにはその散光を当ててきたに過ぎない。特に、花き振興への期待が高まった1990 年代前半、花き産業を対象とした研究は急速に進展した。しかし、それらの研究の多くは、生産、流通、消費などの各領域の問題や課題の指摘にとどまるなど、それは産業構造の解明に主眼が置かれてきた。

現在、わが国のフラワー産業は、育種、生産、流通・小売、消費に、多種多様な経済主体が成立し、それぞれの主体が密接かつ相互に影響し合う構造を有している。さらに2000年以降、国境を越えた経済主体間のネットワーク化が進み、その構造も大きく変化してきている。

ところで食品分野では、生産から消費までの過程を捉えるフードシステム論が展開され、多くの研究が蓄積されている。しかし、花きの分野では、生産から消費にかかわる領域の体系的な研究は確立されておらず、その構造変化に関するアプローチが未だ提示されていない状況にある。

２．研究の目的

本研究では、育種、生産、流通、加工・利用、消費に至る経済活動を総合的、体系的に捉えるフラワーエコノミー論を構築し、わが国のフラワー産業の現状に理論的基礎と戦略的な体系性を確立させることをねらいとする。

１つは、わが国の花き（切り花・鉢物・球根・観葉植物）産業の維持・発展に寄与するフラワーエコノミー論を構築し、今後のあり方を具体的かつ体系的に整理することである。それは多様な経済主体の繋がりによって構成されるフラワーエコノミーを理論化し、新しいパラダイムを提示することにある。

２つは、グローバル化のなかでのフラワー産業の解明であり、それをリードしているのはオランダである。オランダのフラワー産業の解明なくして、フラワーエコノミーにおけるグローバリ・ゼーションの展開を捉えることはできない。

３つは、最もグローバル化の進んだチューリップ球根産業に焦点を絞って、フラワーエコノミー論的アプローチによって、その展開過程および今後のあり方を実証的に分析することである。

３．研究の方法

本研究は、フラワーの商品的特質の明確化とフラワーエコノミーの理論の構築に向けて、既存の研究・資料を分析する。チューリップ球根産業の構造把握のために、既存研究の成果や統計を整理・分析すると共に、わが国とオランダにおいて、生産者・流通業者・加工業者、花き専門小売店、フラワー研究者といった「関係者」「関係機関」へのヒアリング調査を実施した。

４．研究成果

(1)フラワーエコノミー論の構築

「フラワーエコノミー」(Flower Economy)とは、フラワーを観賞する顧客から、小売、卸売、生産、種苗（育種）に至るすべての「経済活動」を含む概念である。そして、その経済活動を、消費過程から、流通・加工、生産、育種過程において、登場する多様な主体等の関連・連携に着目し、フラワーの顧客視点を重視しながら、空間的構造として捉えるものである。したがって、生活者などの社会的関心の高まりに伴う新しい消費、療法や教育的・文化的要素なども含意するものと位置づけることができる。フラワーは、他の野菜や果物などの農産物以上に顧客の細かなニーズとその変化を基本としている。

フラワーは、嗜好性が強く、贈答、装飾、冠婚葬祭などの多様な用途と場面をもつ。そして、多様な用途と場面によって品目・品種等は細かく異なる。フラワーエコノミーは、こうした顧客の細かなニーズとその変化に依拠している。

そこでは、単に消費過程から育種過程間での財（goods）としてのフラワーの流れに着目するだけではなく、フラワーをめぐって多種多様な主体（アクター）が、密接にかつ複雑に絡み合い、相互に影響し合っている状況、すなわち、多様な主体のネットワーク（連携・結合）に着目することを重視している。

いま、こうしたフラワーエコノミーを示せば、図１のように整理することができる。消費、流通・加工、生産、育種過程（プロセス）における主要（Main）な事業体（アクター）を中心として、輸送・保管業者、生産資材業者、金融業者などのフラワー関連事業体を含めることができる。

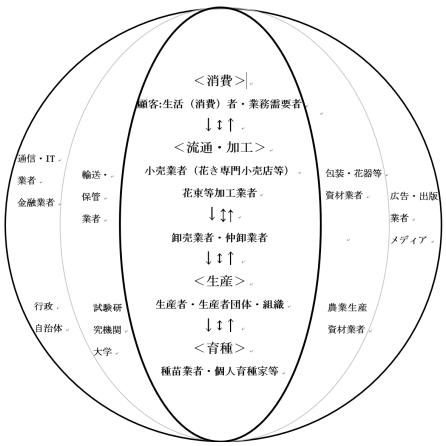

図1　フラワーエコノミー

(2)フラワーのグローバリ・ゼーション
グローバリ・ゼーションは、①時間距離の短縮化（特に流通システムの整備）、②貿易と投資の自由化、③技術情報等の発達など、特に近年（1990 年以降）の進展を意味している。
グローバリ・ゼーションの進展に伴いフラワーエコノミーは拡大している。グローバル化の進展に伴い新たに発生する課題、生産と消費の物理的・心理的拡大、すなわち花瓶・庭の向こう側問題、倫理的問題、CSR 問題も意識する。フラワーのグローバル化は、国際貿易だけを対象とするのではなく、直接投資にも分析対象を広げる。フラワーの国際投資、海外直接投資（ＦＤＩ）の増加は、国際貿易の増加を上回って進展している。

(3)オランダのフラワーエコノミー
オランダは世界で最も大きなフラワーの輸出国であるが、オランダのフラワーエコノミーは危機的状況にある。国内の生産面積や農業経営体、さらに販売本数は、花き産業全体でみると低下し、その展望も必ずしも明るいものではない。オランダやその他の西欧諸国の若者たちは、もはやフラワーをほとんど買わないし、彼らがたとえ歳をとったとしても、購入を始める兆しはみられない。
2007 年以降のオランダのフラワーエコノミー、特に切り花についての動向について注目した。それは、オランダのフラワーエコノミーの大きな変化と課題を指摘することができた。特に、オランダでは、ケニアやエチオピアとの競争激化や消費者需要の減少などにより、花き生産が大幅に減少していることを実証的に明らかにした。

(4)チューリップ球根産業
わが国のチューリップ球根産業は、富山県を中心として、戦前から輸出が開始し、多様な経済主体が密接に関わるなかで発展してきた歴史を持っていた。しかし、チューリップ球根産業は、極めて厳しい状況にあり、球根生産者はもとより、その関係機関・団体は、その明確な打開策を見出せない状況に置かれていた。フラワーエコノミー論から、わが国のチューリップ球根産業として、新たな消費とその活用方法についての具体的な提案を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 宮部和幸、花きの商品的特質と卸売市場の機能、農業と経済、査読無、83 巻(11)、2017、64-69
② 新里泰孝・竹田達也、Leman shock and the flower bulb in Japan and the Netherlands、Acta Horticulture、査読有、1132 巻、2016、55-63、10.17660/ActaHortic.2016.1132.8
③ 宮部和幸、花き産地のマーケティングのあり方を探る－ＪＡひまわり（愛知県）のバラ部会組織の取り組みから－、農業と経済、査読無、82 巻(10)、2016、54-60
④ 宮部和幸、花き種苗の輸入動向とゆくえ、農業と経済、査読無、81 巻（6)、2015、24-28
⑤ 新里泰孝、世界の花き球根産業、富大経済論集、査読無、61 巻(3)、2015、235-269

〔学会発表〕（計１件）
① 新里泰孝・竹田達也、Leman shock and the flower bulb in Japan and the Netherlands、ISHS XVIII International Symposium of Horticultural Economics and Management (国際園芸学会第 18 回園芸経済・経営学国際シンポジウム)、2015

〔図書〕（計１件）
① 宮部和幸、農林統計協会、花き産業構造と六次産業化、戦後日本農業の食料・農業・農村編集委員会編、食料・農業・農村の六次産業化、2018、239-254

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
宮部　和幸（MIYABE, Kazuyuki）
日本大学・生物資源科学部・教授
研究者番号：40409066

(2)研究分担者
新里　泰孝（NISATO, Yasutaka）

富山大学・経済学部・教授
研究者番号：00156019

竹田　達矢（TAKEDA, Tatuya）
富山法科大学・法学部・准教授
研究者番号：20587183
（平成 29 年度より研究協力者）

(3)連携研究者

(4)研究協力者
河野 賢一（KOUNO, Kenichi）
ビユンテ　フランク（BUNTE, Frank）